

意見陳述書

麻田弘潤

私は新潟県小千谷市にある極楽寺という寺院で僧侶として活動しています。

極楽寺のある小千谷市平成町は柏崎刈羽原発から約20キロほど離れたところにあります。

私が原発・放射能の問題に関心を持ったのは昨年9月のことでした。

それまでも関心がないわけではありませんでしたが、あくまで原発立地自治体だけの問題だと思っていましたし、放射能の危険性についても、ある人が安全といえば安全と思い、危険だといえば危険だと思っていました。自分でしっかり調べるといっても人の意見に左右されていました。つまり他人事でした。

そんな私がこの問題に関心を持つようになり、今現在原告として参加している理由は4つあります。

一つ目は、放射能の勉強会を開いたことです。昨年9月に知り合いのある方が「本堂で放射能の勉強会を開かないか」と声をかけて下さいました。関心がないわけではなかった私はきちんと勉強する良い機会だと感じ、会場を提供することにしました。

講師にお招きしたのは新潟大学の野中昌広先生でした。初めて聞くような話が多く、分からないことが多かったのですが、その中で一つだけ強烈に頭に残ったことがありました。

それはICRPとECRRのリスクモデルのグラフの説明でした。講義の中で先生は「放射能が存在している時点でリスクも発生している」ということを話されました。

それまでの私はある一定以下の数値は影響がなく、一定以上の数値の放射能があった時に始めて人体に影響があるものなのだという理解をしていました。

それがそこに放射能がある時点で体に影響があるということをお教えられたことで、基準値という数値に左右されるのではなく、放射性物質が危険物なのだという認識を持つようになりました。

二つ目は地元小千谷で放射能測定を行ったことです。勉強会のあと、市内有志で小千谷市でも実際どれくらいの空間線量があるのか測ることにしました。小千谷では影響がないと言われましたが、実際測ってみると小千谷市でも年間1ミリシーベルトを超える空間線量の箇所がいくつもあることがわかりました。

小千谷市は福島原発から約200キロの位置にあるとのこと。私は原発事故が起きても問題になるのは立地自治体くらいだろうという認識を持っていましたが、200キロ離れた小千谷市で放射能が計測されたという事実から、立地自治体だけの問題ではなくみんなで共有しなくてはならない問題だということに認識を改めることとなりました。

三つ目は実際に被害に遭われ、避難生活を余儀なくされた方々のお話を聞いたことです。それまでは見えない放射能の影響について、「体には影響はない」「ただちに影響はない」というが実は影響があるのではないか、危険なのではないかと考え、それであるならば原発に反対するという立場でした。

政府や学者の土俵で物事を考えて、見えないものに対して最大限の想像力を働かせながら、放射能の勉強をしていました。

しかし、実際に被害に遭われた方々のお話を聞かせていただく中で、実は放射能の被害は目に見えないものでもないし、ただちに影響がないものでもなく、「目に見えて影響がある」ものであるということがわかりました。

故郷を奪われた、仕事を失った、それにより自ら命を絶った方がいる、子どもを被曝させてしまった後悔の念、子どもに何かあるごとに放射能の影響かもしれないと不安にさせられる、コミュニティの崩壊、母子避難による経済的な負担など、原発事故後に受けた多くの苦しみを聞かせていただくことで、放射能の影響を細胞レベルで論ずるのは、実は原発事故による影響のほんの一部の分野であり、体に影響はないとかただちに影響はないことはなく、現段階でもすでに多くの苦しみを原発事故は引き起こしているということがわかりました。

私は放射能の体への影響、つまり自分に影響が及ぼされることについてのみ勉強し、実際に被害に遭われた方々の声を聞こうとして来ませんでした。議論の輪から被害に遭われた方々の存在を排除していました。そのことについて被害に遭われた皆さんにはあらためてお詫びしたいです。大変申し訳ありませんでした。

四つ目は、子ども達の将来を考えたからです。私には3人の息子がいます。おそらくというか確実に彼らが成人になってからも、この問題は続いています。セシウム137の半減期が30年であること。原爆症認定訴訟がごく最近まで行われていたことから明らかです。

それならば今将来のために動かなければ、同じ課題を子ども達に丸投げするだけではないか、少しでも先に進んで、つまり原発の再稼働をストップさせて、子ども達にこの課題をバトンタッチして行きたいと考えました。

それが多くの苦しみを生み出す原因となった原発を放置して来た私たちの責任ではないかと考えます。

私は仏教徒です。仏教思想の特徴は現実をとことん突き詰めることにあります。釈迦牟尼仏は釈迦族の王子として何不自由ない生活をしている時に、城外を苦しみながら歩く人々の存在に気づき、その苦の解決のために出家され、そして長い修行の末悟りを開いたといわれています。

仏教は苦しみの現実を見つめるところが出发点になっています。今回の原発事故を目の当たりにして、今後残された原発をどうするか考える時に、直接被害に遭われた方々の声を聞くことから始めることが必要です。

現実の苦しみを聞くことなく放射能・原発は「安全だ」「危険だ」という議論は、現実を無視した妄想にすぎません。私たちは原発を机上の空論で語るのではなく、目に見えるもので語るべきです。

事故後の現実を直視して、次世代にこのような苦しみを丸投げしないよう、原発の再稼働に私は反対していきます。

以上